

鶴見和子の生活記録運動における学習組織の展開

— 「生活をつづる会」における話し合いの記録ノートの分析から —

猿山 隆子

はじめに

本稿は、社会学者である鶴見和子（1918～2006）が1952年に発足した生活記録サークル「生活をつづる会」での話し合いを記録したノート（以下、「記録ノート」）の分析から、「生活をつづる会」の組織運営の展開と話し合いによる学習のプロセスを明らかにする。さらに、鶴見とメンバー間の相互的な関係性を分析し、構築される鶴見とメンバーとの共同性を考察する。

鶴見が取り組んだ生活記録運動が、当時注目されていた子どもの生活綴方思想と実践から着想を得て、「おとなの生活綴方」として取り組まれたのはよく知られている。そして、生活綴方に取り組んでいた三重県四日市市の東亜紡織泊工場のサークル「生活を記録する会」の活動に刺激を受け、自ら立ち上げた「生活をつづる会」は、鶴見がメンバーとともに試行錯誤しながら作り上げたサークルであり、鶴見の思想を色濃く反映しているといえる。

鶴見は、生活記録運動を、書くこと、読むこと、話すこと、聞くことの一連の行為の繰り返しを通じて獲得される思考形成の方法として把握していた。そのなかで鶴見が重視したのは、「話し合い」である。鶴見は、作品そのものだけではなく、ひとりひとりの体験が作品に結晶していく過程でのさまざまな意見や認識の変化を重視しており、「集団のなかでどのような話し合いをするか」にかかっていると主張している。しかしながら、これまで「生活をつづる会」に関して、文集にもとづいた研究は行われてきたけれども、話し合いに関わる資料が明らかにされていなかったため、話し合いによる学習プロセスが分析されることはなかった。また、サークルの組織構造や運営に関して、「生活を記録する会」を事例にした運営技術の分析が行われているが¹⁾、「生活をつづる会」については、家庭の主婦や女性労働者のグループが「生活をつづる会」へと合流し、組織されたという指摘が従来なされているだけで、組織の構造や運営方法に関してはほとんど注目されてこなかった。「生活をつづる会」の著書『おかあさんと生活綴方』（百合出版、1957年）に「生活をつづる会」のなかで発足したいくつかの小グループの歩みが紹介されているものの、具体的にどのような活動を展開していったのか、その活動を促し、支えた方法はどのようなものであったのか、詳細な研究が行われていないのが現状である。

本稿では、「生活をつづる会」の組織構造と話し合いの学習プロセスに着目し、どのように学びの場を作り出し、どのように学習を進めていったのかを第1次的な史料によって具体的に描き出していく。分析対象となる第一次的な史料とは、鶴見和子が「生活をつづる会」での話し合いを記述した記録ノートとそれに関連するガリ版刷りの文集、冊子、プリント類である。

これらは、京都文教大学図書館が所蔵している鶴見和子文庫の未公開資料から発見したものであり、これまで公開されたことはない。

1. 「生活をつづる会」の組織運営と学習活動

(1) サークルの発足と限界

鶴見が生活記録運動に取り組んだのは1952年のことである。すでに生活綴方を行っていた澤井余志郎を中心とした東亜紡織泊工場の職場サークル「生活を記録する会」の活動に刺激を受けて、助言者として「生活を記録する会」に関わりと同時に、鶴見は、「生活を記録する会」をモデルに、東京で「生活をつづる会」を結成したのである。「生活をつづる会」は、「生活を記録する会」のように労働組合との闘争のような世間の注目を浴びるような大きな活動が展開されることはなかった。しかし、家庭の出来事やこれまでの生き方を母親としての視線で綴った文集『エンピツをにぎる主婦』（鶴見和子著、毎日新聞、1954年）や『ひき裂かれて－母の戦争体験－』（鶴見和子・牧瀬菊枝編、筑摩書房、1959年）は大きな反響を呼び、その活動や文集がメディアで紹介される²⁾など、「主婦の生活記録運動」のモデル的存在として捉えられた。

鶴見は、「生活をつづる会」を次のように説明している。

わたしたちの「生活をつづる会」は、さまざまな地域の主婦や、いろいろな職場で働く娘や、わたしのような自由人のあつまりです。それぞれにちがった暮らし方、考え方、感じ方を、はだかになって出しあい比べ合うことによって、お互いに刺激を与え合うと同時に、ちがった立場の人たちが、共通の問題意識をもって、いっしょに問題を解決していく心のつながりをもつことが、わたしたちの目標です。³⁾

鶴見は、「生活をつづる会」は「生活を記録する会」に「啓発されることが多い」と述べているが、「生活を記録する会」と「生活をつづる会」では、組織の成り立ちが異なる。農村出身の同年代の女性たちの集まりで、生活環境に密着した職場のなかで育ってきたサークルである「生活を記録する会」とは異なり、「生活をつづる会」は、職業も生活環境も年令も異なる人たちの集まりであり、地域や職場などの生活環境とは離れたところで集まりを持った点に特徴がある。そうしたメンバーらの差違を、鶴見は刺激として捉えていることも注目すべき点である。職業も生活環境も年令も異なるメンバーらの差違を前提に、そこに共通する問題を見つけ、解決していくことを目標に掲げた鶴見の思想は、日常生活と連続的な「生活を記録する会」での共感を基礎とした活動とは異なるものである。

組織の成り立ちが異なる「生活を記録する会」と「生活をつづる会」は、組織の展開も異なる。生活記録運動は、書くこと、話し合うことを通じて、生活の問題に取り組んでいく活動である。生活の問題は、自分の住む地域や職場でしか解決できないことが多い。生活や仕事サークル活動と密接につながった「生活を記録する会」とは異なり、「生活をつづる会」は、生活環境とは切り離されたサークルであったため、生活の問題に取り組むには限界があったのである。

「生活をつづる会」にきて、話しあったり考えあったりしても、そのときはたのしい高揚した気持ちになるけれども、それぞれが自分の生活の場にかえったとき、また暗くやりきれない気持ちになってゆく。職場の問題、地域の問題は、やはりそれぞれの職場や地域に、根を深くおろして、自分のまわりによい仲間を積極的につくってゆくのであれば、解決しない、という気持ちが強くなっています。⁴⁾

そして、1954年6月、文集『エンピツをにぎる主婦』の出版をきっかけに、「生活をつづる会」は「再出発」として、いくつかの小グループに分かれ、活動することになったのである。

今度、本が出たことで、第一回の人たちが卒業した、というようになり、大ぜいの人たちのあつまりはここで解散します。私たちは、それぞれの地域や職場で、サークルをつくって、この生活つづり方の会で勉強したことをひろげてゆきましょう。職場の人は職場にもどって、家庭の人は地域にもどって、この運動の体験をいかし、現在の仲間をつくってゆきましょう。⁵⁾

職場内でじっくりと仲間を育てながら、外部との交流を進めていくという「根を広くしていく」経緯を辿った「生活を記録する会」とは逆に、職場や地域などの生活の場から離れ、様々な人々の集団である「生活をつづる会」が向かったのは、それぞれの生活や職場で、自分の周囲に仲間をつくっていくという「根を深くする」⁶⁾方向であった。

小グループに分かれて活動することになった理由には、サークルの規模の問題もあった。新聞記事やメンバーによる投書によって活動が世間に知れ渡るようになると、10名ほどで発足した「生活をつづる会」は、2年間でメンバーが30名以上に増え、さらに、入会を希望する人々も出ていた。メンバーの増加で、例会を行う場所に入りきらず、話し合いが満足にできないという問題が生じ、サークルから小グループへと学習の場の規模を変えることになったのである。

(2) 小グループによる組織運営

小グループがいくつ存在したのかは今のところ定かではないが、1955年には9グループ⁷⁾、1957年には14グループ⁸⁾が確認できる。「生活をつづる会」発足当初からのメンバーで構成された「研究会」、「山の手の主婦グループ」である「ひなたグループ」、「30代の専門的な職業をもつ未婚婦人グループ」である「あゆむ会」、「洋裁サークルから始まった主婦グループ」である「平井サークル」、「文学グループ」など⁹⁾、それぞれの生活の場で、職業や生活環境が近い人々や興味、関心が同じ人々の集まりに分かれていることが分かる。グループの大きさは「お互いに膝をつきあわせてじっくり話しあえる」こと、「みんなが仲良くなれる」ことを重視し、「十人から二十人」が適当だと鶴見が指摘している¹⁰⁾ように、小グループの構成人数は多いところで約20名であった¹¹⁾。

組織運営の方法として興味深いのは、鶴見が「一つのグループをつくって、そのグループのメンバーが、一人の世話役に頼っているあいだは、ほんとうにおたがいに対等な者どうしの集

団とはいえません」¹²⁾と、グループを持続していくことに拘らず、積極的に自分のグループを作っていくことを奨励していることである。例えば、「生活をつづる会」発足当初からの古いメンバーと「山の手方面のPTAのおかあさん数名」が1954年に作った「ひなたグループ」から、数名のメンバーで新たに「つくしグループ」を1956年に発足するなど¹³⁾、サークルのメンバーが小グループを作り、小グループからさらに新たなグループが生まれている。それによって、メンバーそれぞれがグループ活動に責任をもつことを目指しているのである。これらの小グループは、バラバラに分裂していたわけではない。「生活をつづる会」発足当初からのメンバーで構成された「研究会」は、グループ間の連絡や交流を兼ねて、各小グループの「世話役」が毎月1回集まる場であった。このように、「生活をつづる会」は、ひとつのサークルから小グループで構成される組織に転換し、多方向に分岐しながら延びていく発展をしたのである。

(3) 小グループの学習活動と「生活をつづる会」全体の学習活動

新たな組織構造での学習活動はどのように行われたのだろうか。小グループは、それぞれ独自の学習活動を展開している。例えば、日々の生活を書きつづるグループ、戦争体験を書き残すグループ、生活記録だけでは満足できず、社会科学の勉強会の開催や「うたごえへの参加」など、生活記録を書くこととは離れた活動を行うグループもあった¹⁴⁾。

注目すべき点は、各小グループが独自の活動を行うと同時に、「生活をつづる会」全体としての学習活動も行っていたことである。例えば、『エンピツをにぎる主婦』を出版した後、合評会を開催し、サークル外の人々の感想をまとめた『『エンピツをにぎる主婦』感想文集』を出している。そのなかで「つづり方のよせあつめで、そのひとつひとつのつづり方が、どんななかまの話しあいや生活のなかから生まれてきたのかを描いていなかったことを国分さん〔国分一太郎－引用者〕はじめ多くの方たちに批判された」¹⁵⁾ことから、研究会が中心となり、生活記録の作品とともに、作品に仕上げるまでのグループの話し合いや書いた後の活動など、活動プロセスを解説した『おかあさんと生活つづり方』を（生活をつづる会著、百合出版、1957年）を出版した。1959年に出版された『ひき裂かれて－母の戦争体験』（鶴見和子・牧瀬菊枝編、筑摩書房、1959年）は、「山の手的主婦グループ」である「ひなたグループ」が2年がかりでまとめたガリ版文集「母の戦争体験」（1958年）が元になっている。研究会が中心となり、他の小グループのメンバーも参加し、世相史や戦争体験を新たに書いたり、書き直したりして出版したのである。「生活をつづる会」では、小グループ活動の独自性を保つと同時に、「生活をつづる会」全体として組織横断的な学習活動が行われていたのである。

2. 話し合いの記録ノートの概要

(1) 記録ノートの構成

小型の大学ノートに書かれた記録ノートは、小グループのひとつである職場グループの記録が3冊－「生活をつづる会 職場グループ① 1954年12月～」「生活をつづる会 職場グループ(2) 1956年1月～6月」「職場グループ 1957年6月～」－、研究会の記録が4冊－「生活

をつづる会 生活つづり方研究会 I 1954 年 8 月～1955 年 1 月」「生活をつづる会 研究会 1955 年 3 月～12 月マデ 鶴見和子」「生活をつづる会 研究会 1955 年 12 月～」「生活をつづる会 研究グループ 1957 年」－である。

記録ノートはどのような内容だったのか。詳細内容として、日時、開催場所、出席メンバーの名前、議長、書記、会計などの係を担ったメンバーの名前、次に、話し合いの内容、最後に、次回例会の日程と宿題が記録されている。職場グループ、研究会のどちらの記録ノートも、日時が前後しているページがあったり、それぞれのグループの記録が混じっていたりと、整理されていない箇所がある。ノートにはメモ用紙が挟んであり、そのメモ用紙に記録されている場合もある。記録ノート（以下、メモ用紙の記録を含む。）の記録の特徴として挙げられるのは、まず、「〇〇（名前）――（発言内容）」（以下、記録ノートの発言内容を引用する場合、名前はアルファベットで記す。）というように、誰がどのような発言をしたのか、誰がどのような提案をしたのか、その発言や提案を受けて、誰が賛成し、反対したのか、誰が何をするのか、などが明確に分かるように記述されていることである。もうひとつは、「……するんじゃないかしら」、「……考えちゃった」、「そうよ、そうよ」、「……したの？」というように、対話の形式で発言内容が書かれている点が挙げられる。

例会の様子を記した記録として、記録ノート以外に、鶴見宛にメンバーから郵送されたプリントがある。職場グループでは、会費に通信費を計上しており、書記を担当するメンバーが記録した「その場で記録できる程度の簡単なもの」をプリントし、郵送していた。プリントの内容は、記録ノートと形式の項目はほぼ同じではあるが、プリントは、話し合いに関する書き方が対話の形式ではなく、例会当日の話し合いの決定事項が要約されて書かれている。記録ノートには、例会の記録が欠落している月があり、その月に鶴見宛に郵送されたプリントがあることから、鶴見が例会を欠席したために、記録ノートに記録が残されておらず、例会の報告が郵送されたと推測できる。

記録ノートに書かれている文字を他の鶴見の手書き原稿と照らし合わせてみると、鶴見の筆跡と確認できる。また、記録ノートには、赤鉛筆で下線が引いてある箇所を多く見ることができるが、この箇所と鶴見の著作のなかで鶴見が引用したり、説明したりした内容がほぼ一致する箇所がある。こうした点から、この記録ノートは、鶴見が職場グループと研究会の話し合いに参加するなかで自ら記録したものであり、鶴見個人のフィールドノートであると推測できる。もちろん、記録ノートには、約 2 時間の話し合いの内容や状況すべてが記録されているわけではないだろう。また、記述がどの程度正確であるのかは分からない。こうした意味で、小グループの展開は、あくまで記録ノートによる「事実」ではあるが、しかし、鶴見は、「会合の記録は、なるべく丁寧にとっておけば、それがグループの歴史にもなります」¹⁶⁾と例会の記録を重視しているように、少なくとも、鶴見が捉えたその話し合いの雰囲気や話し合いに含まれている問題をできるだけ忠実に浮かび上がらせようとしたと考えることができ、鶴見の意図を知ることができる記録として見ることができる。

(2) 職場グループと研究会の活動

①職場グループ

記録ノートとそれに関連するプリント、冊子を中心に、職場グループと研究会の活動を概観する。職場グループ¹⁷⁾は、紡績工場や事務職などの女性労働者を中心にしたグループである。1954年12月に発足した職場グループは、第2回例会が開かれた1955年1月9日から、グループが解散する1960年10月13日までの約6年間の記録が残されている。文集は、生い立ちや現在の職場のことを描いた「機関誌1号おいたち」が1冊のみである。

記録ノートによると、所属しているメンバーは、1955年には20名、1960年の解散時には12名、例会の出席者数は毎回約10名前後であった。女性が中心であったが、途中、男性が3～4名加入している。例会は、日曜日13時からメンバーの家、あるいは平日18時30分か、19時から新宿の喫茶店で行われていた。活動は生活記録に取り組んでおり、メンバーの共通の話題である職場の問題から書き始めたが、メンバー同士の理解を深め、また、それぞれが自分自身を捉え直すために、自己紹介や生い立ちを書くことにし、その後、直面している職場や家庭の問題を書き合い、話し合いを行っていた。

このグループは、発足から1年が経たない時期から、例会の出席率の低さ、書き手の少なさなどが問題となっており、グループの方針や運営方法をたびたび議論している。そして、1960年9月27日の例会で、「個々の人々の環境の変化や集まりにくい状況」を理由に解散することが決定した。事前に解散に関する話し合いをすることが知らされていたにもかかわらず、この日の例会の出席者は6名であった。10月30日、閉会式と「懇親晩餐会」が開かれ、6年間の活動に幕を閉じた。

②研究会

研究会¹⁸⁾は、「生活をつづる会」発足当初からのメンバーが中心となり、「生活記録」というものについて、すこしつっこんでみよう」ということを目的に、グループ間の連絡もかねて作られた¹⁹⁾。研究会の世話役は鶴見であったと思われる²⁰⁾。記録は、発足した1954年7月から1958年7月までは確認できるが、それ以降の記録が現在のところ発見できていないため、活動期間は定かではない。例会は、月1回、日曜日にメンバーの家を会場に行われた。

話し合いの記録から、研究会の役割を大きく2つに分けることができる。ひとつは、組織運営の観点から、各小グループのサポートとネットワーク化である。研究会には、各小グループの世話役が集まり、学習活動の報告や、グループ内で起きている問題やメンバーが抱えている生活の問題を議論し合っていた。また、各グループで利用する原稿用紙の購入、小グループが集うピクニック、合同新年会なども企画、運営といった事務的なことをも行っている。二つ目の役割は、学習活動の観点で、生活記録を深め、実践を対象化していく活動である。1. (3)で挙げた「生活をつづる会」の組織全体としての組織横断的な学習活動へと発展させる活動と同時に、研究会独自の活動として、生活記録運動に関わる研究者を呼び、文学との関係や書き方の問題などについての話し合い²¹⁾や「集団創作」の試みなどが行われた。研究会発足の目的は、生活記録の「理論化」を進めることにあった。しかし、小グループの活動を支えながら、様々な活動を行っていることから、当初の目的とはズレが生じ、「何をやる会なのか」という会の

方向性についての議論がされているように²²⁾、その方法はあいまいさを免れられず、実践を客観的な対象へと具体化することが試みられたが、「理論化」は困難であった。

3. 話し合いのプロセスと共同性

(1) 学習環境のあり方と例会の運営方法

「生活をつづる会」はどのように運営されていたのか。職場グループと研究会の記録をみると、例会を含め、ピクニックや合宿などの行事の時にも、準備から当日の司会、会計、記録などの役割はメンバーが持ち回りで担っていた。例会の会場もメンバーの家を持ち回りにしていた。例会に出席／欠席に関わらず、会費 30 円～ 50 円が集められ、菓子代、プリント代などがまかなわれた。グループ運営はメンバー同士で役割分担し、運営を担っていたことが分かる。

例会では、お茶、お菓子が振る舞われた。ピクニックや合宿などではジェスチャーゲームや歌などのレクリエーションが盛り込まれていた。学習環境の雰囲気づくりに気を配り、グループ内の親睦を深めていくことに力が注がれたことがうかがえる²³⁾。例会の様子を報告するプリントを郵送していること、休んでいるメンバーだけでなく、退会したメンバーへの連絡をとるようにすること、職場グループが解散する際には連絡係を決め、問題が起こったときには集まれるようにしていたことなどコミュニケーションも図られている。学習環境づくりやグループ内のコミュニケーションを図ることは、自発的に集まるきっかけやよい人間関係のなかで円滑に学習を進めていくために工夫された方法でもあるだろう。

このように、記録ノートからはメンバーによる積極的なグループの運営をみることができるが、職場グループの記録には、鶴見とメンバーとの関係性が示されている興味深い記述がある。

鶴見－「エンピツをにぎる主婦」のグループをやっていたときより、この会の方がいいような気がする。前はわたしがひきまわしていた感じ。司会も自らやるし、お金もたりないと自らで出していた。ところがこんどは司会はみんなひきまわす。会計も、あたしが出すのではなく、会費のなかでまかなってゆく。(中略) これは前より進歩だと思う。²⁴⁾

小グループに分散する以前の著作のなかで、鶴見は、活動におけるメンバー同士の「対等」「平等」を重視していた。しかし、この鶴見の発言から、サークルとしての活動では、メンバーらは鶴見に依存しており、鶴見を中心に運営が行われていたこと、その後の小グループでの活動では、鶴見も含めて、メンバー同士でグループの運営を担うようになるなど、グループの運営方法が鶴見中心の運営からメンバー同士の運営へと変化したことが分かる。

(2) 話し合いのプロセス

①学習に関する話し合い

職場グループの記録から、例会での話し合いを3つの内容に分けることができる。ひとつは、学習に関する話し合いである。職場グループでは、ほぼ毎回、生活記録の作品の検討が行われ

ている。記録ノートには、書き手やリポーターが読んだ生活記録2、3編の題名と簡単な内容、それに対する文章表現に関する議論と共感や批判などの内容に関する議論が記述されている。鶴見は、書き方よりも、生き方、考え方を重視する傾向にあるが²⁵⁾、記録ノートには、文章表現に関する記述よりも、体験に対する共感や批判など考え方、生き方についての記述が多く見られる。

また、学習の方向性に関する議論が多い。例えば、出版社から依頼のあった原稿を書くかどうか²⁶⁾といった活動方針や、ひなたグループが取り組んだ戦争体験を「生活をつづる会」全体の仕事として展開するという研究会の提案に対して、職場グループとして参加するかどうか²⁷⁾といった「生活をつづる会」全体としての活動と小グループとしての活動の関わりが議論されている。職場グループとしてではなく、個人で参加するという話し合いの結論から、「生活をつづる会」では、小グループの自発性やメンバーの自発性が重視されていたことが分かる。

②組織運営と生活記録を「書く」ということ

二つ目は、小グループの運営に関する議論である。例えば、「男の人を入れることについて」²⁸⁾や外部のサークルとの交流についてなどの話し合いが行われている。また、2(2)①に挙げたように、出席者の少なさ、書き手の少なさという問題から、グループ運営について議論している²⁹⁾。こうしたグループの活動内容や運営方法の見直しをする作業は、「書くのがさきだからただ書けばいいのか」「なんのために書いているのかははっきりさせなければいけない。」「楽しいから書くのが先じゃないか」³⁰⁾というように、同時に「書くとは何なのか」「なぜ書くのか」という生活記録の根本的な問題を突き詰めていく議論でもあった。職場グループでは、6年間、常に生活記録を「書く」意味を問い続け、メンバーそれぞれが自らの書く意味を見いだそうとしたのである³¹⁾。

③話し合いを振り返ること

三つ目は、例会での話し合いを振り返ることである。職場グループでは、次の例会で「この前の会の反省」「感想」が議論されている。例えば、「この前はどんどん読んじゃったから、ゆっくり時間をかけてやっていくべき」といった作品の検討をめぐる感想や批判、「くるたびに出入りがはげしすぎる」といった会の運営方法に対する不満などが語られている。そして、こうした学習内容に関することや、組織運営、例会の方法に関するものの不満や問題点に対して、改善案を話し合っている。問題によっては数回にわたって議論されることもあった。「この会では、一つの問題を解決していくところまで話し合っていくことを学んだ」³²⁾というメンバーの言葉に表れているように、振り返りは、組織運営や学習方法の改善であるとともに、周囲の人々とともに問題を解決していく手続きを学ぶことでもあったといえる。

(3) 鶴見とメンバーとの関係性の変化

鶴見は、生活記録運動を行うなかで、メンバーを「平等」「対等」「仲間」と表現し、指導者の高みに立つことを拒否した。しかし、1954年頃、鶴見は著作の中で、自らの立場がメンバーの痛烈な批判の対象になっていることを語っている³³⁾。そして、それまで「対等」「平等」と

言いながら「わたしに対する批判を、率直に出せない空気を、私自身がつくっていたとすれば、たいへんなことなのです」と自己批判をしている。

職場グループでは、運営をメンバー同士で行い、学習においても、鶴見自ら「おいたち」を書き、それについての話し合いをする³⁴⁾ように、自ら「学ぶ」姿勢をメンバーらに示すなど、鶴見は、メンバーとの関係が双方向的であることを目指していたといえる。しかし、「平等」「仲間」という鶴見の考え方は、発足当初からグループ内に浸透していたわけではなかった。

職場グループの発足当初の話し合いを見てみると、鶴見を中心した学習活動が行われており、それに対し、メンバーは物足りなさを感じていることが分かる。

- —ちゅうぶらりんになっている。ツルミさん中心になってやっている。あなたまかせでやっているとラクだけれど、自己紹介なんかだってもっともあじけない。——会社の——でございます、といて、とっともあじけない。自分のことを出しきってない。／自分の大体のくらしをはじめに出しあうとお互いにすっと入りやすいのではないか。

自己紹介をかいてみたらどうか (赤の下線)

自分のまわりにもまずつながりをつくっていかなくちゃいけないんだな、と思うようになる。

- ツルミ—生活のこと、／給料がいくらはいって、それをどうつかっているか、勤務条件はどうかをみんな書いてきて、それを中心にして書いてみる。³⁵⁾

そしてその後、メンバー自身によって、鶴見の提案で学習を進めていた状況を問題として取り上げられている。

- S —あんまりみんなたよりすぎていた。鶴見さんがこうしたらどうか、というとみんなひきずられてしまう。そしてやってみて、ものたりなくなったりする。

- K —鶴見さんのいうことに反論ができないでひきずられていくのはわるい。³⁶⁾

こうした記述から、職場グループが発足した当初、メンバーたちは例会での役割を担っているが、メンバー同士で討論を促すような形式というよりも、鶴見対メンバー一人一人という形式であり、メンバーらは何をどのように書くのかといった学習に関して鶴見に依存し、受動的な姿勢に陥った活動になりがちであったことが分かる。しかし、鶴见到頼った学習活動に問題があるという認識をもつこと自体、メンバー自身が受け身の姿勢から一歩踏み出したといえよう。

その後、メンバー同士の討論のあり方や何を書くのかなど議論を積み重ね、メンバーが意見や提案をするようになり、積極的な姿勢を示していくようになる。それに伴い、鶴見とメンバーらは対等に議論する関係に変化している。例えば、「生活をつづる会」全体の仕事として、戦争体験を書くことを重視したい鶴見、戦争体験は書きたくない、生い立ちに重点を置きたいメンバーとの議論にみることができる。

K - 自分をとりまいている人間関係を書くべきだ。ツルミさんは、戦争体験を書くことをとても考えていらっしゃるけど、わたしたちはおいたちを書くことに重点をおいている。

ツルミ - 私はおかあさんたちのほうから戦争体験を書こうという気持ちがでてきて、それを若い人たちのグループにおしつけたというけいこうはある。しかしまでは、若い人のばあいは、戦争体験よりも、戦後体験の方が大切だということがわかった。しかし、戦争体験も、戦後体験も含めて、生活キロクは、私たちの現代史を書くうんどうなのだと思う。/ おいたちを、そういう意味で現代史につなげることができるのではないかと思う。³⁷⁾

このような度重なる議論と「戦争体験を書ける人は書く」という結論に至る過程から、鶴見に依存した姿勢から対等に議論する立場への変化と同時に、メンバーらが自らの書く意味を追求する能動的な姿勢への変化を捉えることができる。そして、「生活をつづる会」発足の目標に、メンバーの差違を刺激として捉え、共通の問題を解決していくことを掲げていたように、鶴見は、戦争体験の取り組みによって、生活、職業、年代など異なる立場から歴史を検証しようとしたのであり、それは、さまざまな違いをもつメンバーらと鶴見が互いに刺激し合い、異質なものを認め合いながら、そのなかでどこに共通点を見だし、どのように結びつくことが出来るのかを模索する試みであったといえよう。

おわりに

本稿では、未公開資料である話し合いの記録ノートを中心に、鶴見和子が自ら発足した「生活をつづる会」の組織の実態とその活動について具体的に描き出した。「生活をつづる会」は、ひとつのサークルの形式を解消し、学習環境づくり、学習組織の運営、学習内容の選択において自立的な活動を行ういくつかの小グループで構成される会へと転換した。生活環境の違い、年代の違い、生活課題の多様性など、異質性を含んでいた「生活をつづる会」の運営の基礎としては、各小グループがすべて一致するような活動を求めてはいない。戦争体験を本にするように、「生活をつづる会」全体の活動に参加する / しないは各グループの判断にゆだねられていた。「平等」「対等」を主張した鶴見は、強力な組織づくりや統一された意志決定など、一定の型を拒否したし、それが適さない組織であった。「生活をつづる会」の運営方法は、それぞれの小グループの活動を充実させることにかかっていたといえる。それと同時に、研究会によるそのサポートとネットワーク化によって、生活記録を書く意味さえも様々である各小グループが組織横断的なテーマを取り扱うことは、異質性をはらみつつ、互いに刺激しあいながら、どこまで共通の問題としてつながれるのかという試みであったといえよう。

本稿では、鶴見が記録したノートから読み取ることができる「生活をつづる会」の組織の成立に作用する要因と学習活動の内容に関する分析であったため、今後、文集や生活記録の作品など、当時の他の史料ともつきあわせて、多方面から比較検討する予定である。また、この記

録ノートから読み取ることのできる鶴見の思想と、鶴見が取り組んだ組織構造や学習方法が生活記録運動全体のなかでどのように置づけられるのか、今後の検討課題としたい。

(注)

- 1) 諸岡武、中村宣興、真野典雄「サークルとしての職場内小集団」『日本社会教育学会年報 日本の社会教育 第三集 小集団学習』国土社、1957年、106-123頁。
- 2) 鶴見和子文庫未公開資料に以下の資料がある。ラジオ放送台本『新日本放送台本 NJB ホール ラジオストーリー 貧乏ゆすり－エンピツをにぎる主婦から－』、テレビ台本『暮らしの中に 主婦の綴り方 日本テレビ放送網株式会社』
- 3) 鶴見和子「話しあい、書きあう仲間」鶴見和子著『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社、1954年、34頁。
- 4) 鶴見和子「母の歴史をつくった人たち（あとがき）」木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出書房、1954年、402頁。
- 5) 11月28日開催の『エンピツをにぎる主婦』合評会の計画として書かれた挨拶の原稿。記録ノート『生活をつづる会 生活つづり方研究会 I 1954年8月～1955年1月』1954年11月14日。
- 6) 鶴見和子「母の歴史をつくった人たち－集団のなかの人間の成長」木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出書房、1954年、402頁。
- 7) 記録ノート『生活綴方研究会 1955年3月～10月マデ』1955年4月24日。
- 8) 冊子『生活をつづる会のあゆみ』（未公開資料、作成年1957年）、『おかあさんと生活綴方』（生活をつづる会編、百合出版、1957年）「生活をつづる会・年表」からの確認。
- 9) 記録ノート『生活綴方研究会 1955年3月～10月マデ』1955年4月24日。
- 10) 鶴見和子「グループをどのように運営してきたか」生活をつづる会著『おかあさんと生活綴方』百合出版、1957年、213頁。
- 11) 冊子『生活をつづる会のあゆみ』（未公開資料、作成年1957年）、『おかあさんと生活綴方』（生活をつづる会編、百合出版、1957年）「生活をつづる会・年表」で、現在、確認できるグループの構成人数である。
- 12) 同前、212-213頁。
- 13) 冊子『生活をつづる会のあゆみ』（未公開資料、作成年1957年）4-10頁。
- 14) 鶴見和子「グループ紹介」『おかあさんと生活綴方』生活をつづる会編、筑摩書房、1957年、233-237頁。
- 15) 栗田やすこ「おかあさんの戦争体験」編集・鶴見和子「私のページ」『作文と教育』1957年、8巻第8号、55頁。例会の話し合いでも同様の内容が指摘されている。「I－本がでたことはうれしいが、一番大事なエッセンスがぬけているのではないか。本の出来てゆくプロセス－動きが本のなかで出ていない。外在的な批判が出ている原因。」記録ノート「生活をつづる会 生活つづり方研究会 I 1954年8月～1955年1月」1954年11月。
- 16) 鶴見和子「グループをどのように運営してきたか」生活をつづる会著『おかあさんと生活綴方』百合出版、1957年、214頁。
- 17) 「職場グループ」「職場婦人グループ」といくつかの名称があるが、記録ノートに「職場グループ」という記述が多いため、本稿では「職場グループ」とする。
- 18) 「研究会」「研究グループ」「生活つづり方研究会」「研究会グループ」などの呼び方が記されているが、記録ノートには「研究会」という記述が多いため、本論では「研究会」とする。
- 19) 鶴見和子「グループ紹介」生活をつづる会著『おかあさんと生活綴方』百合出版、1957年、236頁。「生活をつづる会・五年の歩み（年表）」同前、240頁。
- 20) 同前、236頁。「世話役」として明記されているわけではないが、研究会の連絡先として鶴見の自宅が記載されている。
- 21) 野間宏を呼んで以下の議題が話し合われた。「・生活つづり方とはなにか－定義。実作をも

- とに話し合うこと。・生活つづり方と文学の関係、ちがひ。・“書けない”ということ。・モチーフの問題。」などが挙げられている。記録ノート『生活をつづる会 研究会 1955年3月～12月マデ 鶴見和子』1955年3月27日。
- 22) 例えば、「A 一人をふやすことばかり考えていないで、この会はなにをする会か、ということとははっきりさせなければならない。この会は、はじめは生活つづり方の理論をやっているということで始めた。それがグズグズになって、サークルのレンラクをやっているということになった。」「A 生活つづり方ではできないことがあるのかどうかははっきりしない。なぜここに来てくるのかわからない。」記録ノート『生活をつづる会 研究会 1955年3月～12月マデ 鶴見和子』1955年10月23日。
- 23) 鶴見は三重県四日市市の東亜紡績工場のサークル「生活を記録する会」に初めて参加した時に、メンバーとコーラスを歌ったり、踊ったり、カナダの日系移民研究として聞き取り調査などのフィールドワークの時は、日本舞踊を踊っていることから、人々の緊張を解きほぐし、場を和やかにすることで、親密な関係を作り出そうと心がけていたことが分かる。
- 24) 記録ノート『生活をつづる会 職場グループ① 1954年12月～』1955年3月20日
- 25) 小グループの話しあいに関して鶴見は以下のように述べている。「わたしたちの場合は、書き方よりも、考え方や生き方など、内容についての話しあいのほうに重点がおかれました。」鶴見和子「グループをどのように運営してきたか」生活をつづる会著『おかあさんと生活綴方』百合出版、1957年、218頁。
- 26) 角川女性講座に原稿を掲載するという話が持ち込まれ、話し合いをしている。「I 一本に出すということは、つまさんがここにいるということからくる特殊なこと、みじくくなものをだしてそれでいいと思ってしまうのはよくない。/T1 出さない方がいい。時期が早すぎる。/生活つづり方運動として出すなら、もっとグループの発展過程が分かるのを出すのがいい。/T2 個人ならいいが、グループとして出すのはまだ早い。(以下、略)」記録ノート『生活をつづる会 職場グループ① 1954年12月～』1955年10月2日。
- 27) 「K ーいまのわたしたちの力の限度で書いて、それを元に出せるならやってもいいと思う。O ー文集のなかで利用できるものがあれば、出してもいい。でも自分たちは積極的に協力できない。/K ー利用だけでなく出すならば、一緒に分析にも参加しなければならないと思う。/O ーわたしたちのこれからの方向は折角きまったのに、グループとして戦争体験をやるという雑音が入るのはイヤだと思う。その意味では利用してほしい。/T ーぼくは戦争体験にそんなにいうべきことはないんだ。/K ー2, 3人は協力できる人があると思う。だれかが協力したら計画が乱れるということはないと思う。/この会の外にでて、刺激をうけてここへもちかえるということはいいことだと思う。/S ーなぜいまこのようにふたたび日本の冬がやってこようとするときに、なぜ筑摩書房のようなジャーナリズムが戦争体験を出そうとするのかということを見ると、サークル内部の問題だけで考えているのはせまいことではないか。」記録ノート『職場グループ 1957年6月～』1957年10月13日。「戦争体験」に取り組むかどうかについては、何度も話し合いが行われている。
- 28) 「O1 ー(略) 男の人の理解がないと、女の人のはのびられないといわれたから、ぜひ入れるべき/U、T、Y、I、S、T ー賛成」「ツルミ ーどういう人を入れるべきかを決めてほしい。/O2 ーまだわたしたちのあいだがかたまっていないのに、男の人をどんどんいれてしまう、というのはどうか。(以下、略)」記録ノート『生活をつづる会 職場グループ① 1954年12月～』1955年6月19日。
- 29) 例えば「これからサークルをどうやっていくか」という議題で次のことが決定している。「仕事の分担、サークル員として最低限守るべきこと」として、「a. 連絡責任者 I (引き続いてやって頂く) b. 欠席の場合は、事前にIさんに連絡すること」(電話番号が記載) c. レポーター、司会、書記は、今迄通り交代にする。記録はその場で記録できる程度の簡単なものでよい。それをIさんにコピーをとって、送付していただく。d. 会費\30- は、欠席の日も払うこと、会計M」記録ノート『職場グループ 1957年6月～』1960年1月。
- 30) 例えば、記録ノート『職場グループ 1957年6月～』1957年10月13日。

猿山：鶴見和子の生活記録運動における学習組織の展開

- 31) 例えば、「おいたちを書くことは自分を知ることだから書きたい」「みんなのなかでおいたちが書きたい」「年表をするようになって熱気がなくなった」など。記録ノート『職場グループ 1957 年 6 月～』1960 年 1 月 11 日。
- 32) 記録ノート『生活をつづる会 職場グループ① 1954 年 12 月～』1955 年 3 月 20 日。
- 33) 鶴見和子「話しあい 書きあう仲間」鶴見和子著『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社、1954 年、225-238 頁。
- 34) 鶴見は次のようにメンバーに話している。「みなさんが生い立ちを書くだけでなく、あたしも自らおいたちを書こうと思う。仲間のひとりになるということ。」記録ノート『生活をつづる会 職場グループ① 1954 年 12 月～』1955 年 3 月 20 日。
- 35) 記録ノート『生活をつづる会 職場グループ① 1954 年 12 月～』1955 年 6 月 19 日。
- 36) 記録ノート『職場グループ 1957 年 6 月～』1957 年 10 月 13 日。
- 37) 同前 2 月 15 日。記録の年月日が前後しており、定かではないが、「戦争体験」について話し合う内容から 1958 年と推測する。

(生涯教育学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

Development of the “*Seikatsu-kiroku*” Movement
(Life-Record Movement) of Tsurumi Kazuko:
Analysis of the Records of a Discussion by
“*Seikatsu o tuzuru kai*” (*Writing Group*)

SARUYAMA Takako

This paper explains the structure of “Seikatsu o tuzuru kai” writing group based on mutual discussions in which Tsurumi Kazuko had participated. This group is part of the “Seikatsu-kiroku” Movement (the life-record movement) which was organized by Tsurumi in 1942. In 1954 it separated from the larger circle into several small groups. Tsurumi belonged to a group of female workers and a research group. This paper suggests the following: (1) The group of female workers not only decided the contents of “Seikatsu-kiroku” essay, but also managed their groups by themselves and initiated activities according to their needs. (2) The research group developed the activities of several groups and supports these groups as a central group in “Seikatsu o tuzuru kai”. However, the research group was not able to theorize “Seikatsu-kiroku”. (3) Members of the group of female workers and the research group took roles for management of the group. Before 1954, Tsurumi had initiated management of the circle. Even after it formed several small groups, the members managed their groups passively. However they eventually began to assume management roles voluntarily through the small-group activities. Later members took the Tsurumi's place as a leader, and Tsurumi and members tried to realize the equal relationship.